サウジアラビア
ー「イスラーム世界の盟主の正体」

高尾賢一郎著
中公新書
２０３ページ
220781191　秋野颯太

序章　イスラームの世界観とその現代的理解

- ６１０年イスラームはムハンマドが唯一神アッラーから啓示
- イスラームは四人の正統カリフに継承
- ムハンマドは預言者としての使命を完了
- イスラームには「正しいイスラーム」が法的見解として持続的に生産
- しかし使徒にとっては不確実
- 近代以降宗教も未だ重要な役割
- イスラームの成立から現代までの主要な側面と、近代世界における宗教の評価を解説

第一章　サウジアラビアの歴史

- １７４４年政教依存国家が誕生
- サウジアラビアは政教分離国家の形
- ワッハーブ主義は一神教の厳格な実践が強い考え方
- これがイスラーム社会に影響
- サウジアラビアは三回の王国を経験
- 今ではワッハーブ主義の影響下
- しかし今では国際社会背の立場を確立

第二章　サウジアラビアの宗教の概念

- シャイフ家とサウド家が大きな社会的影響力を保持
- ビシャーズ地方のムハンマドの末裔シャリーフはメッカとシッダの管理人
- しかし時代とともにその役割が変化

・ワッハーブ主義はシャリーフの社会的地位を批判

・最高ムフティー職誕生

・現在は国内外の挑戦に直面。正しいイスラームの維持が目的

第三章　王室と権力

- サウジアラビアは多くの王族がいるのに対し、日本は１８人
- 王族内にもヒエラルキーが存在
- 国王は司法、行政、立法の三権を所持
- 国王や皇太子は外交にも自ら参加

第四章　石油がもたらしたもの

- 石油が莫大な富を創出
- サウジアラビアの社会構造と国際立場を変化
- オイルショックはサウジアラビアの国際的地位を高め、テクノクラートの台頭を促進
- 石油依存により経済が不安定
- 別名資源の呪い
- 外国人労働者が全体の半分を、３分の１が公務員

第５章　過激主義の潮流

- １９７９年サウジアラビアのイスラーム世界において立場が危険に、イワーンの反乱が原因
- ムスリム同胞団の流入
- ウサーマ・ビン・ラーディン主導者が世界的過激主義の象徴
- これの対抗としてイスラーム言説を形成
- 過激派組織との差異の強調のため寛容なイスラームのイメージを推進

第６章　変革に向かう社会

- ２０１７年皇太子が穏健なイスラームの回帰を宣言
- これ以降女性の権利拡充や自動車運転の許可など社会が変化
- さらに観光産業も強化
- サウジアラビアの変革を強調

終章　イスラーム社会としての過去、現在、未来

- ワッハーブ主義を国の方針とし、時代により宗教的立場を変化
- 政治と宗教関係の変化
- サウジアラビアの過激派主義との決別を国際社会は歓迎
- ビジョン2030の反映
- イスラームの再解釈から国民生活も変化